第5章　倭人「卑弥氏」（佃説）

1　倭人（卑弥氏）とは

(1)「松野連」と呉王夫差

『新撰姓氏録』に「松野連」がある。

松野連
出自呉王夫差也。　　『新撰姓氏録』右京諸蕃
（訳）呉王夫差より出るなり。

「松野連」は「呉王夫差」より出るという。

(2)「松野連系図」

「松野連系図」があり、「松野連」は「呉王夫差」から始まっている。

○「松野連系図」
松野連　姫氏
呉王夫差―（中略）―熊鹿文（くまかや）（姓姫子、称卑弥子）―（後略）
「松野連系図」

「松野連」は「姫氏」とある。「姫氏」は周王朝の姓である。「呉（国）」は周の太王の子（太伯と仲雍）が呉へ行き建国した国である。したがって「呉」は周王朝と同じ「姫氏」である。

【考察】
『魏略』は「倭人（天氏）は呉の太伯の後裔である」と記す。実際は「太伯」は周王朝の人であるから「倭人」は「呉の太伯の後裔」ではない。「太伯」の時代に「呉地方に居た」という意味であろう。
「松野連」も同じである。「呉王夫差」の後裔ではなく、「呉王夫差」の時代に「呉地方」に居て渡来したという意味であろう。
「松野連」の先祖に「熊鹿文」が居る。それには「姓姫子、称卑弥子」と注記がある。「姓姫子」は「姓姫氏」であろう。同じく「称卑弥子」は「称卑弥氏」であろう。「松野連」は「卑弥氏」である。

□「松野連」は「呉」地方から渡来している。
■「松野連」は「卑弥氏」である。
■「松野連（卑弥氏）」は呉地方から日本列島に渡来している。

■「倭人（卑弥氏）」は「倭人（天氏）」と同じく「呉地方」から「日本列島」に渡来している。

2　「倭人（卑弥氏）」の移動

(1) 黄河下流域の倭

「前473年」の「呉越の戦い」で呉は滅びる。

「卑弥氏（賁彌辰沄氏）」も「天氏」と同じく「呉地方」から逃げる。黄河下流域に来て「倭国」を建国する。

蓋国在鉅燕南倭北倭属燕　　『山海経』海内北経

（訳）蓋国は鉅燕の南、倭の北に在り。倭は燕に属す。

「鉅燕」とは「燕」のことである。戦国時代の燕は北京市の近くの「薊（けい）」にあった。

「倭（国）」を称するのは「倭人」の中でも「卑弥氏（賁彌辰沄氏）」だけである。

□「前473年」の「呉越の戦い」で呉は滅びる。「倭人（天氏）」と同様に「倭人（卑弥氏）」も北へ逃げて「黄河下流域」に来たのであろう。

図8　黄河下流域の倭

(2) 大凌河上流の「倭城」

「卑弥氏」は黄河下流域から大凌河の上流へ移る。

白狼水又東北逕昌黎縣故城西。地理志曰、交黎也。東部都尉治。（中略）高平川水注之。水出西北平川。東流逕倭城北。蓋倭地人徙之。　　『水経注』

（訳）白狼水はまた東北に流れ、昌黎縣の故城の西に至る。地理志に曰う、交黎なり。東部都尉治である。（中略）高平川の水はこれに注ぐ。水は西の北平川を出る。東流して倭城の北に至る。思うに倭地人がここに徙ったのであろう。

「白狼水」は「右北平郡白狼縣」を流れる川である。

遼水右会白狼水。水出右北平白狼縣東南、北流、西北屈逕廣成縣故城南。

『水経注』

（訳）遼水は右に白狼水と会う。白狼水は右北平郡白狼縣の東南より出て、北流し、西北に屈して、廣成縣の故城の南に至る。

「白狼水」は大凌河の上流にある。（図9）

（注）「白狼水」という川は現在は無い。「白狼水」は「白狼縣の東南より出て、北流し、西北に屈して」とあることから推定した。

「高平川の水はこれ（白狼水）に注ぐ。水は西の北平川を出る。東流して倭城の北に至る」とある。これにより「倭城」の位置が判明する。

図９　大凌河上流の白狼水と倭城

「倭城」は「倭地人がここに徙ったのであろう」とある。「倭地人」とは黄河下流域の「倭（国）」であろう。

□「卑弥氏」は黄河下流域から大凌河の上流に移り、「倭城」を建国する。

- 「倭（国）」を称するのは「卑弥氏」である。
- 「倭城」とは「卑弥氏（倭）の城（国）」という意味であろう。
- 「卑弥氏」も「呉地方」から黄河下流域を経て、「大凌河上流」に来ている。

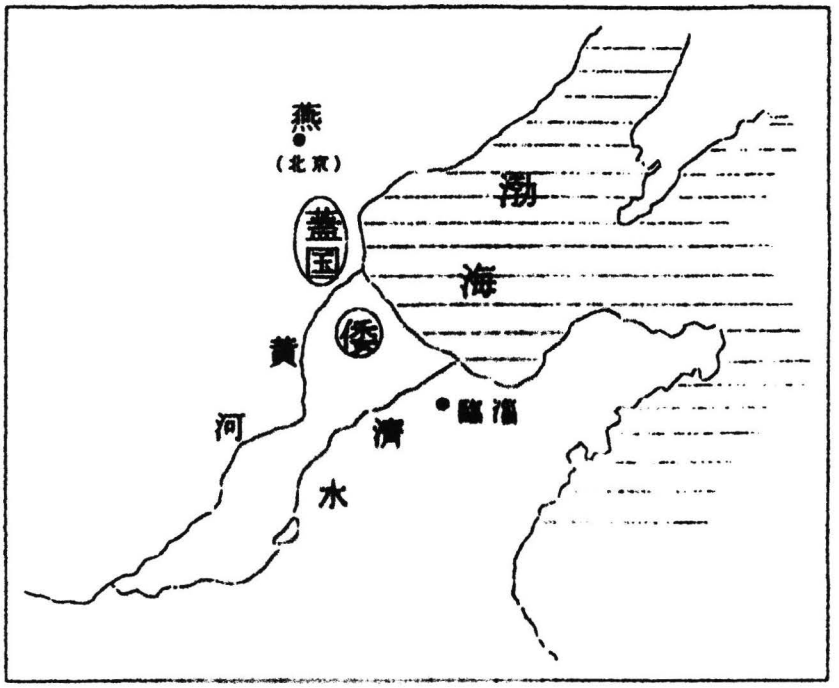

図８　黄河下流域の倭

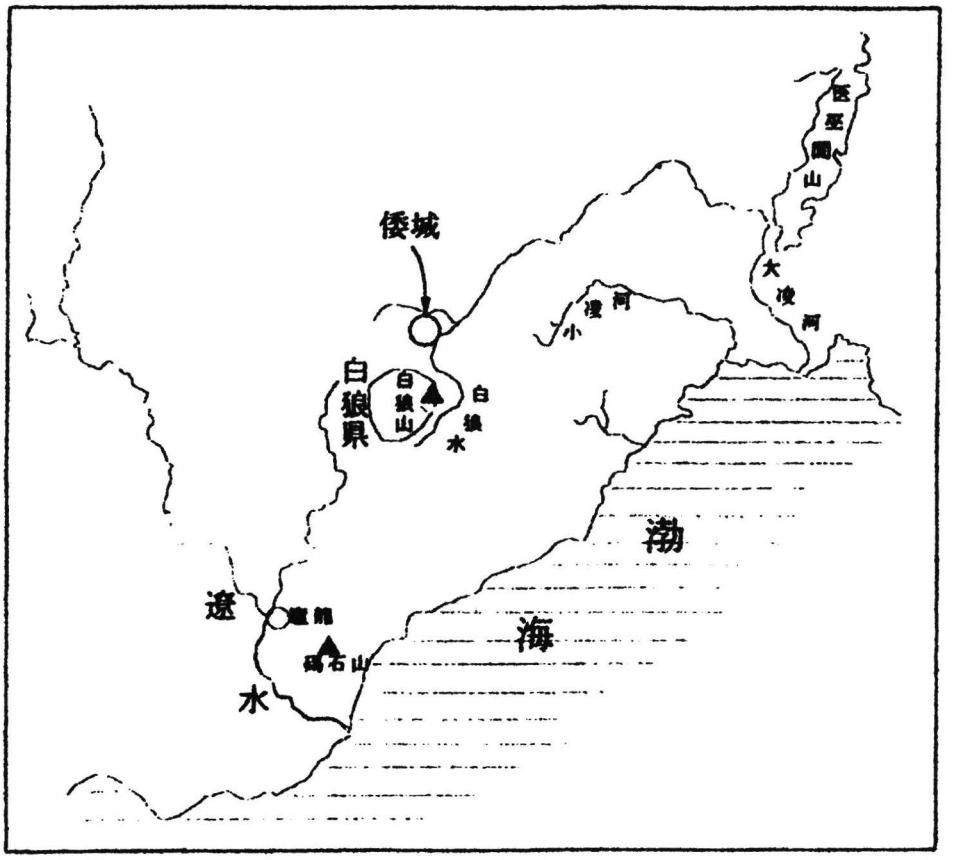

図9　大凌河上流の白狼水と倭城

第6章　中国東北地方の古代史（周～戦国時代）

1　燕と箕子朝鮮の戦い

(1)『魏略』の「箕子朝鮮」

昔、箕子之後、朝鮮侯見周衰。燕自尊為王、欲東略地、朝鮮侯亦自称為王、欲興兵逆戦燕。（中略）乃遣将秦開、攻其西方、取地二千餘里、至満番汗為界。朝鮮遂弱。　『魏略』

（訳）昔、箕子の後、朝鮮侯は周王朝が衰え、燕が自ら尊び王と為り、東の地を攻め取ろうとするのをみて、朝鮮侯もまた自ら称して王となり、兵を興し燕と戦わんと欲した。（中略）乃ち燕は将軍秦開を遣わし、朝鮮の西方を攻め、地二千餘里を奪い、満番汗を以て界とした。朝鮮は遂に弱まる。

「箕子の後、朝鮮侯は」とある。朝鮮は「箕子朝鮮」であることがわかる。

(2)『契丹古伝』の「箕子朝鮮」

秦自是益豪。燕亦加彊。殷遂以孛浹勃大水為界、譲曼灌幹之壌、而東。（中略）至是燕築塞。繞曼灌幹城、曰襄平。　『契丹古伝』

（訳）秦は是より豪を益し、燕もまた彊（つよ）さを加える。殷は遂に退き、孛浹勃大水をもって境界とし、曼灌幹之壌を譲り、東へ退いた。（中略）ここにおいて燕は塞を築く。曼灌幹に城をめぐらす。これを襄平という。

『魏略』は「満番汗」と記す。『契丹古伝』は「曼灌幹」である。
「箕子朝鮮」は「曼灌幹」の地を譲り、東へ逃げる。
燕は「曼灌幹に城を繞（めぐら）し、襄平という」とある。「城塞」を築いている。

(3)『史記』の「箕子朝鮮」

『史記』も燕と箕子朝鮮の戦いを記す。

燕有賢将秦開。為質於胡、胡甚信之。帰而襲走東胡。東胡卻千余里。（中略）燕亦築長城。自造陽至襄平。　『史記』匈奴列伝

（訳）燕に賢将といわれた秦開が居た。秦開は胡へ人質に出された。胡は秦開を甚だ信用したという。ところが国に帰ると秦開は東胡を襲い追い出した。東胡は千余里退く。燕はその地に長城を築く。長城は造陽より襄平に至るという。

燕は「東胡」を追い出して「その地に長城を築く」「長城は造陽より襄平に至る」とある。「燕の長城」である。

同じ「襄平」が出てくる。したがって「東胡」は「箕子朝鮮」であることがわかる。

『契丹古伝』では「曼灌幹に城をめぐらす」とある。「城塞」は「燕の長城」であることがわかる。

□「箕子朝鮮」＝「殷」＝「東胡」（史書により表記が異なる）

■燕は「箕子朝鮮」を追い出して「曼灌幹」の地に「燕の長城」を築く。

■燕は「曼灌幹」の地を「襄平」と改めている。

2　古代中国王朝の領域

(1) 箕子朝鮮の反撃

殷（箕子朝鮮）は燕に破れて東へ逃げるが、反撃して「殷の故地」を回復する。

秦自是益豪。燕亦加彊。殷遂以孛浯勃大水為界、譲曼灌幹之壌、而東。（中略）至是燕築塞。繞曼灌幹城、曰襄平。将又越孛浯渤強行。阻断二国。伐燕、克之。踰渝、及孤竹。盡復殷故地。　『契丹古伝』

（訳）秦は是より豪を益し、燕もまた彊（つよ）さを加える。殷は遂に退き、孛浯勃大水をもって境界とし、曼灌幹之壌を譲り、東へ退く。（中略）ここに至り燕は塞を築いた。曼灌幹に城をめぐらす。これを襄平という。将にまた孛浯渤大水を越えて強行し、二国を阻断す。燕を伐ち、これに勝つ。渝を越え、孤竹に及び、ことごとく殷の故地を回復す。

□「箕子朝鮮」の領域は「孤竹」まであったことがわかる。

■「孤竹」は「灤河（らんが）」の東側の川岸にある。

図10　灤河と孤竹

(2)「箕子朝鮮」の領域

「箕子朝鮮」の領土は「孤竹」より東側である。周の武王が箕子に与えた「朝鮮」である。「朝鮮」は周王朝の領域外の地にある。すなわち周王朝の支配領域は「灤河」までであることがわかる。

□「箕子朝鮮」の領域が判明

■「箕子朝鮮」の領域は「灤河～襄平（曼灌幹）」までである。

3　「燕の長城」と「万里の長城」

(1)「秦・趙・燕の長城」

「前四世紀～前三世紀」に秦・趙・燕は異民族の進入を防ぐために長城を築く。

秦有隴西・北地・上郡、築長城以拒胡。而趙武霊王亦変俗胡服、習騎射、北破林胡・楼煩、築長城。自代並陰山下、至高闕為塞。而置雲中・鴈門・代郡。（中略）燕亦築長城。自造陽至襄平。置上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東郡。以拒胡。　『史記』匈奴列伝

（概訳）秦は隴西・北地・上郡の地を得て、胡族の反撃を阻止するために長城を築く。これが「秦の長城」である。

趙国は武霊王の時に長城を築く。武霊王の在位は「紀元前325年～299年」である。武霊王は北方民族に対抗するために自ら北方民族の服（胡服）を着て、騎射を習い、北方の林胡・楼煩を攻めて取り、長城を築いた。長城は代から陰山の下に沿い高闕に至るという。そこに雲中・鴈門・代郡を置く。これが「趙の長城」である。

燕国は将軍秦開を胡へ人質に出す。胡族は秦開を甚だ信じたという。ところが秦開は燕に帰ると逆に東胡を襲い敗走させる。東胡は千余里退く。燕も亦長城を築き、造陽から襄平に至る。上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東郡を置き、以て胡を防ぐとある。これが「燕の長城」である。「紀元前284年」頃のことであるといわれている。

「燕の長城」は「造陽から襄平に至る。上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東郡を置く」とある。これが「燕の五郡」である。

□「前284年」頃、燕は「造陽から襄平」まで長城を築き、「五郡」を設置する。

図11　燕の五郡

(2) 万里の長城

現在の「万里の長城」の位置は「図12」の位置にあると云われている。

図12　万里の長城の位置（定説）

ところが『史記』は「万里の長城」について次のように記す。

秦の始皇帝は他の六国を滅ぼし天下を統一すると「秦・趙・燕の長城」を利用して「万里の長城」を築く。

後秦滅六国。而始皇帝使蒙恬将十萬之衆、北擊胡。悉収河南地。因河為塞、築四十四縣城臨河、渉適戍以充之。而通直道、自九原至雲陽。因辺山険塹谿谷可繕者治之。起臨洮至遼東、萬余里。

註…括地志云、秦隴西郡臨洮縣、則今岷州城。本秦長城首。起岷州西十二里、延袤萬余里、東入遼水。　『史記』匈奴列伝

（概訳）他の六国を滅ぼして中国を統一した秦の始皇帝は蒙恬（もうてん）を使わし、十萬の兵をもって北の胡を撃ち、河南の地を得て、黄河を塞として四十四縣城を黄河に沿って築かせ、遠地の守備兵を渉（うつ）してこれに

充てたという。そして直通の道を通した。それは九原から雲陽に至るという。さらに山険により、また谿谷を利用して修繕すべきはこれを治し、臨洮より起こし遼東に至る、萬余里。これが「万里の長城」である。

「万里の長城」は「臨洮より起こし遼東に至る、萬余里」とある。
『史記』蒙恬列伝も同じように記す。

秦已并天下。乃使蒙恬将三十萬衆、北逐戎狄、收河南、築長城。因地形用険、制塞、起臨洮至遼東。延袤萬余里。
　註…［正義］遼東郡在遼水東。始皇長城東至遼水、西南至海之上。
『史記』蒙恬列伝
（概訳）秦はすでに天下を併す。乃ち蒙恬をして三十萬の衆を将かせ北の戎狄を駆逐し、河南の地を収め、長城を築かしむ。因りて地形は険を用い、塞を制して、臨洮より起こし遼東に至る。延長萬余里。

□「万里の長城」は「臨洮より遼東に至る」とある。
- ■「遼東」は「燕の遼東郡」である。
- ■『正義』に「遼東郡は遼水の東にある」とある。
- ■「万里の長城」の東端は「遼水の東の遼東（郡）」である。
- ■「万里の長城」は「燕の長城」を利用して造られていることがわかる。
- ■「万里の長城」の東端は「山海関」である。
- ■「山海関」の長城の南が「襄平」である。

(3)「箕子朝鮮」と「遼水」

○「前284年」に燕は箕子朝鮮を追い出して「燕の長城」を築き、「遼東郡」を置く。
- ■「箕子朝鮮」の地が「遼東郡」になる。
- ■『正義』に「遼東郡は遼水の東にある」とある。
- ■「箕子朝鮮」は「灤河の東にある」。「灤河＝遼水」であることがわかる。

□「遼水」＝「灤河」

4　箕子朝鮮と大凌河

(1) 箕子朝鮮と孛浹勃大水

「殷（箕子朝鮮）」は燕との戦いに敗れて東へ退く。

秦自是益豪。燕亦加彊。殷遂以孛浹勃大水為界、讓曼灌幹之壤、而東。（中略）至是燕築塞。繞曼灌幹城、曰襄平。将又越孛浹渤強行。阻断二国。伐燕、克之。踰渝、及孤竹。盡復殷故地。

及秦滅燕、乃與之、約卻地千里。以孛水為界、如故。　『契丹古伝』
（訳）秦は是より豪を益し、燕もまた彊（つよ）さを加える。殷は遂に退き、孛浹勃大水をもって境界とし、曼灌幹之壌を譲り、東へ退く。（中略）ここに至り燕は塞を築いた。曼灌幹に城をめぐらす。これを襄平という。将にまた孛浹渤大水を越えて強行し、二国を阻断す。燕を伐ち、これに勝つ。渝を越え、孤竹に及び、ことごとく殷の故地を回復す。

「殷（箕子朝鮮）」は「燕」との戦いに敗れ、「孛浹勃大水を以て界と為す」とある。その後「箕子朝鮮」は反撃する。「孛浹渤大水を越えて強行し」、「孤竹に及び、盡く殷の故地を復す」とある。

○燕に敗れた「箕子朝鮮」は東へ逃げて、「孛浹勃大水」を越えたところに住み着いている。

■反撃の時も「孛浹渤大水を越えて強行し」とある。

■箕子朝鮮の地から東へ逃げて、最初に出てくる「大水（大河）」は「大凌河」である。

□「孛浹勃大水」＝「大凌河」であろう。

図13　箕子朝鮮の故地回復

(2) 秦時代の「箕子朝鮮」の位置

『契丹古伝』は続けて次のように記す。

及秦滅燕、乃與之、約卻地千里。以孛水為界、如故。　『契丹古伝』
（訳）秦が燕を滅ぼすに及び、この地を与え、千里退くことを約束する。孛浹勃大水をもって界と為す。故の如し。

「前222年」に秦は燕を滅ぼす。箕子朝鮮が回復した地は「燕の遼東郡」であった。秦は「燕の遼東郡」まで支配することになる。「箕子朝鮮」は回復した土地を秦に明け渡して東へ逃げて、再び「孛水（孛浹勃大水）を以て界と為す。故の如し」とある。

□「秦の時代」の「箕子朝鮮」は再び「大凌河」の東側に移っている。

5　「倭人（天氏）」と「箕子朝鮮」の関係

(1)「殷と姻を為す」とは

「倭人（天氏）」は「殷と姻を為す」とある。氏族と氏族が「婚姻」しているような状態をいうのであろう。ほとんど「同族」に近い関係になっているのではないだろうか。

「倭人（天氏）」は「箕子朝鮮」の地に逃げて来て、土地を分けてもらう。「倭人（天氏）」は「箕子朝鮮」に恩を感じている。「箕子朝鮮」に危機があれば「倭人（天氏）」

は氏族を挙げて危機を回避するために力を注ぐであろう。

(2)「倭人（天氏）」も「燕」と戦う

「前284年」頃、「箕子朝鮮」は「燕」と戦う。「倭人（天氏）」も当然「箕子朝鮮」を助け、「燕」を戦ったであろう。

「箕子朝鮮」は「燕」に敗れて「大凌河」の先へ逃げる。「倭人（天氏）」も「箕子朝鮮」と行動を共にしたであろう。

□「前284年」頃、「倭人（天氏）」も「箕子朝鮮」と共に「大凌河」の先まで逃げている。

(3) 故地を回復

「箕子朝鮮」はその後「燕」を伐ち、故地を回復する。

この時も「倭人（天氏）」は「箕子朝鮮」と一緒に「燕」と戦っているであろう。

□「倭人（天氏）」も再び「元の箕子朝鮮」の地に戻っている。

(4) 秦時代の「倭人（天氏）」

「前222年」に、秦が燕を滅ぼした時、「箕子朝鮮」は回復した土地を秦に明け渡して再び「大凌河」の先まで逃げる。

「倭人（天氏）」はこの時も「箕子朝鮮」と行動を共にしているであろう。

□「秦時代（前221年～前207年）」の「倭人（天氏）」は「大凌河」の東に居る。

■「倭人（卑弥氏）」は大凌河上流の「倭城」に居る。

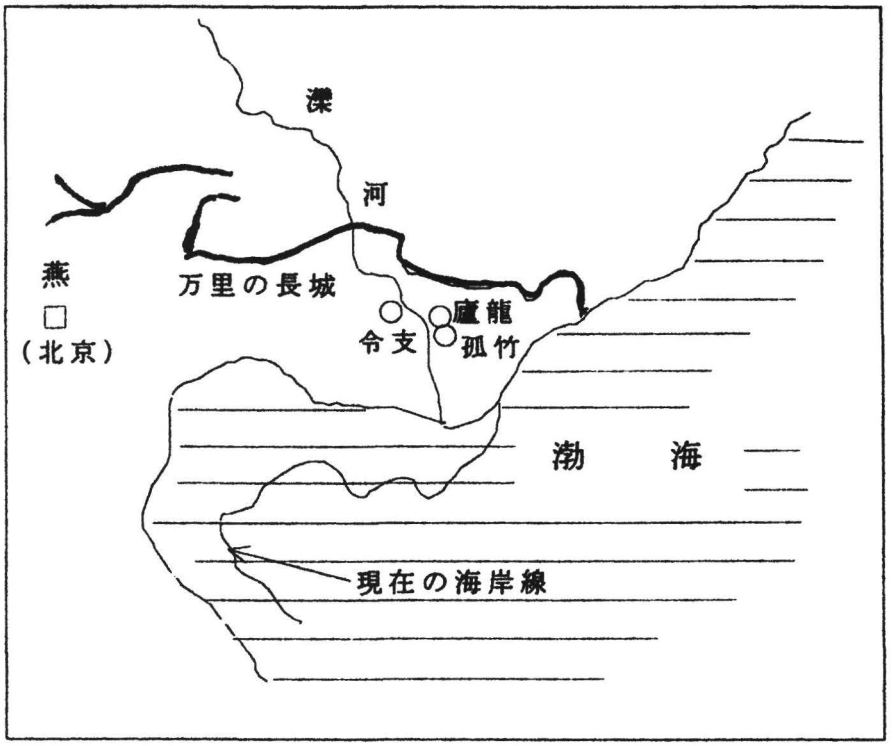

図10　濡河と孤竹

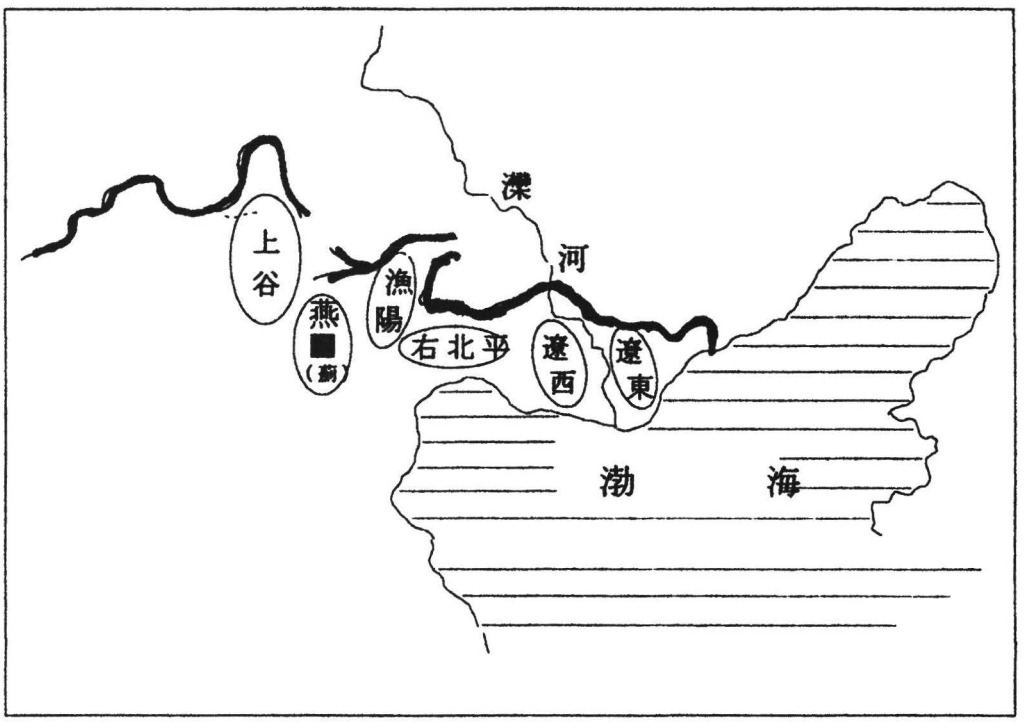

図11　燕の五郡

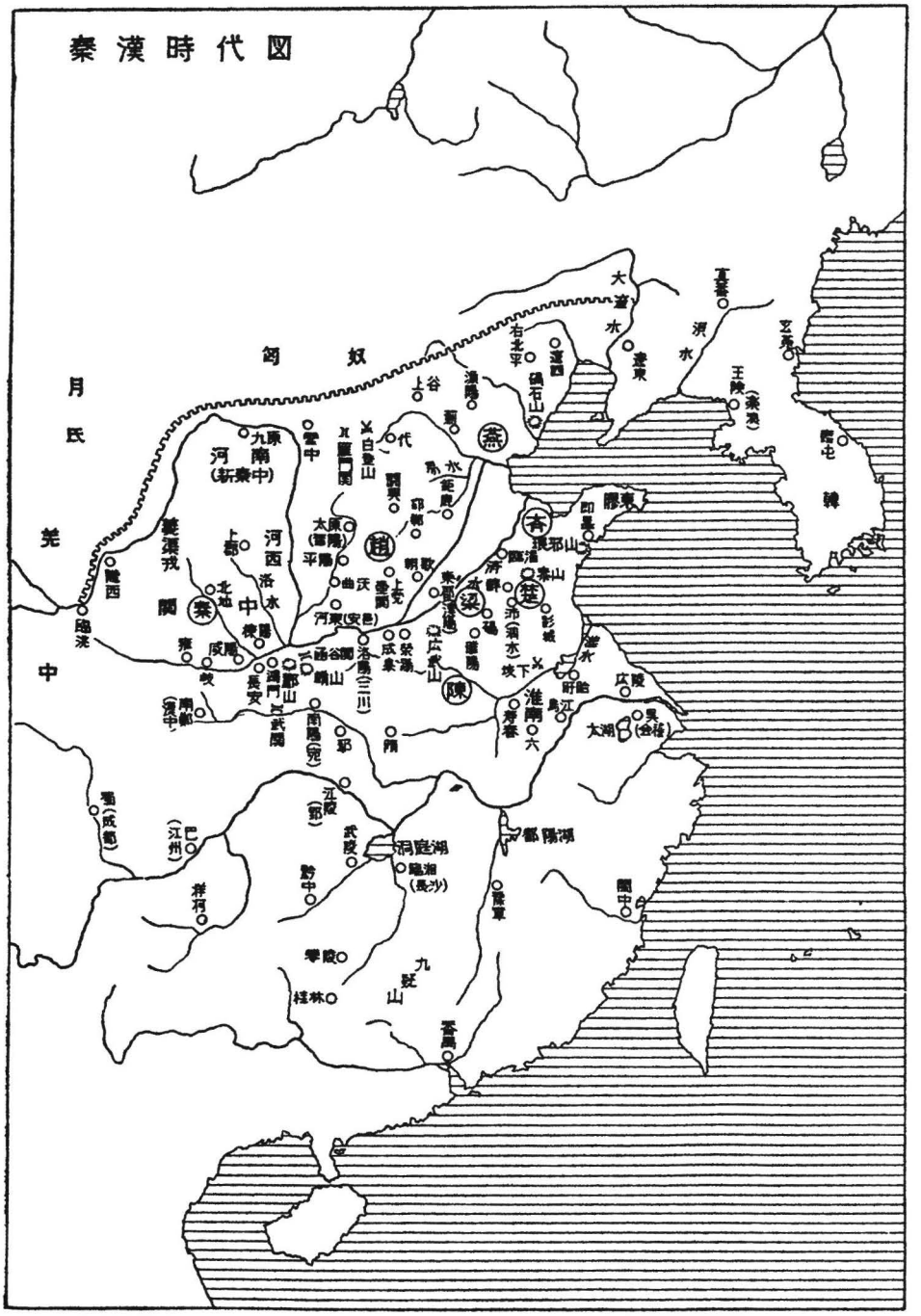

図12　万里の長城の位置（定説）

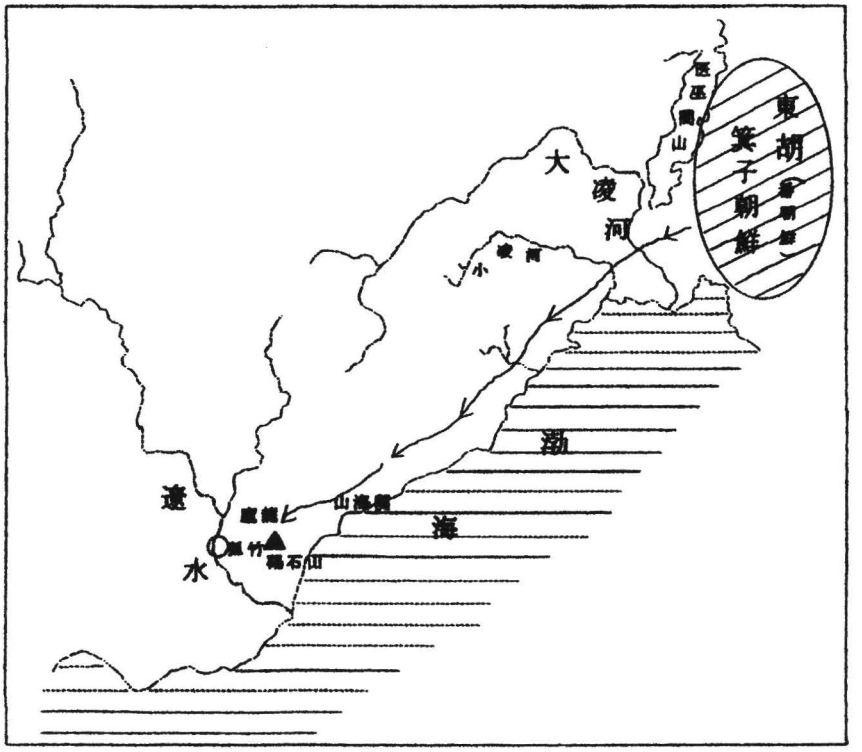

図13　箕子朝鮮の故地回復